

4月 第17回統一地方選挙と北海道

浅野 一弘

2011年4月24日投開票の第17回統一地方選挙後半戦では、夕張市長選挙と室蘭市長選挙の結果が、大きな注目をあつめた。なぜなら、夕張では、30歳の鈴木直道・候補が、そして、室蘭では、33歳の青山剛・候補が勝利したからである。そのため、翌25日付の『北海道新聞』朝刊の1面には、「夕張市長 30歳鈴木氏*全国最年少*室蘭は33歳青山氏」との文字がおどった¹⁾。

夕張市長選挙は、1月11日の時点で、現職の藤倉肇・市長が、「新しいまちづくりの道筋がついた」として、4月の市長選挙に立候補しないことを正式に表明した²⁾。だが、すでに、前年(2010年)の11月12日付の『北海道新聞』夕刊には、「夕張市の藤倉肇市長(69)が、来春の市長選に出馬しない意向を後援会幹部に伝えていたことが12日、明らかになった」との記事が掲載されている。不出馬の理由について、「後援会幹部によると、藤倉市長は体調面での不安や市役所内部でのあつれきなどを理由」としたそうである³⁾。とりわけ、「市内で計画されていた産業廃棄物処分場への対応などで市役所内部の求心力が低下していたこと」が大きいようであった。具体的には、産業廃棄物処分場の建設に関して、「当初は容認姿勢を示していた」ものの、2009年「11月に一転して反対に回り、市の担当者は対応に振り回された」のだ。このほか、「来年度から新築が始まる市立診療所についても指定管理者をどうするのかあいまいにしたまま」のため、市の幹部からも、「リーダーシップがない」との声がでていたそうである。しかも、わずか「4年間の“退場”」について、「市民からは『1期だけ、というのはいかがか』との声が上がった」という⁴⁾。

周知のように、2006年6月20日、夕張市長の後藤健二が、市議会の冒頭で、財政再建団体への移行を正式表明したため、夕張市は、いちやく、全国的な注目をあつめることとなった。翌2007年3月9日には、その後藤が、「財政再建団体のスタートを切れたことで一定程度の責任を果たせたと考え、今期限りで引退を決意した」と述べ、およそ1カ月後に予定されていた、市長選挙に立候補しないことを正式に表明した。このときの報道をみると、「再建団体への移行を主導してきた後藤氏の引退で、同市長選は候補乱立による激戦の可能性が高くなっている」と記されていた⁵⁾。事実、このときの夕張市長選挙には、7名の候補者が名乗りをあげた。「本命不在の乱戦となり、再選挙の可能性も取りざたされた」なか、前出の藤倉が「経済界から労組まで幅広く支持を得て激戦を制した」⁶⁾。この藤倉は、「親子三代夕張育ち」で、「高校卒業後、タイヤ工場などで働いて経営者にな

った苦勞人」である。おそらく、夕張市民は投票に際して、「二〇〇一年に北海道ヨコハマタイヤ販売の社長に就任し、五十六の系列企業の中で最低ランクだった業績を、二年半で全国一位に立て直した実績」も、重視したにちがいなからう⁷⁾。

図1 夕張市長選挙（2007年4月22日）の結果（投票率：81.72%）

						(得票率 [%])
当	3,330	藤倉 肇	66	無新		37.26
	2,988	羽柴 秀吉	57	無新		33.44
	1,157	千代川 則男	59	無新		12.95
	773	若林 丈人	62	無新		8.65
	461	森谷 猛	72	共新		5.16
	187	鴨川 忠弘	68	無新		2.09
	40	作出 龍一	33	無新		0.45

だが、その4年後の選挙では、夕張市民は、ビジネスの世界に精通した人物ではなく、行政マンを市政のトップに選出することとなった。2011年の市長選挙を制した鈴木は、東京都の職員であったが、「2008年1月から約2年2カ月間、東京都から夕張市に応援職員として出向」した経験を有している。2010年「4月に都に復帰して内閣府地域主権戦略室に出向していたが、夕張の市民団体から出馬要請を受け、同11月に都を退職した」。立候補を正式表明した折り、鈴木は、「北海道一元気なまち夕張を実現するため夕張ブランドのセールスマンになりたい」と語ったそう⁸⁾。

図2 夕張市長選挙（2011年4月24日）の結果（投票率：82.67%）

						(得票率 [%])
当	3,569	鈴木 直道	30	無新1		45.17
	2,779	飯島 夕雁	46	無新自公み		35.17
	1,440	羽柴 秀吉	61	無新		18.22
	114	笹谷 達朗	52	無新		1.44

選挙戦は、「連合などの支持を受けているが、既成政党からの推薦は受けず、若さと東京都との連携を強調している」鈴木と前衆議院議員で、「自民、公明両党や、国政選挙で民主党候補を支えた農民団体の推薦を受け、地域医療充実などを柱に掲げる」飯島夕雁、

4年まえの選挙で次点に終わり、今回、「メタンガスなど地下資源開発を打ち上げ、支持拡大を目指している」羽柴秀吉、そして、「唯一の地元出身者」で、「休止中の温泉施設ユーパロの湯の再開などを訴えている」笹谷達朗の4名のあいだで争われた⁹⁾。鈴木ウリは、「(地方交付税)不交付団体の東京都は国にモノが言えるので、夕張が生活実態として困っていることを国に訴える際のサポートをしてもらおう。石原慎太郎都知事は夕張応援団であることを約束してくれている」というもので、ことさら、東京都とのつながりを強調した¹⁰⁾。くわえて、鈴木つよみは、30歳という若さであった。現に、『北海道新聞』の分析でも、「夕張市長選で元東京都職員の鈴木直道氏が当選したのは、市民が鈴木氏の若さと都との連携に期待した結果だ」と断じている¹¹⁾。

では、ここで、年齢に着目して、今回の統一地方選挙を検証してみよう。北海道だけにかぎっていえば、市町村長選挙の場合、最年少の候補者は、夕張市の鈴木氏の30歳であった。30代の候補者は、鈴木のほか、前出の室蘭市の青山(33歳)と小樽市の森井秀明(38歳)がいた。夕張市以外の選挙結果に関して、室蘭市では、2万4,800票を獲得した青山が、60歳の佐藤博(新人)をわずか429票という僅差でくだしている。小樽市の森井は、2万4,864票獲得したものの、64歳の中松義治(新人)の2万7,982票におよばず、敗北を喫している(このほか、69歳の佐藤静雄〔新人〕が1万4,569票を獲得)。

他方、北海道内の最高齢の候補者は、三笠市長選挙に立候補した小林和男(現職)の75歳であった。小林のほか、70代の候補者としては、芦別市の林政志(71歳:4期目)、由仁町の竹田光雄(70歳:1期目)、沼田町の西田篤正(70歳:3期目)、今金町の湯浅秀夫(70歳:新人)、下川町の安斎保(73歳:3期目)、天塩町の浅田弘隆(70歳:1期目)、滝上町の村山勝利(71歳:新人)、鹿追町の吉田弘志(71歳:3期目)、大樹町の伏見悦夫(70歳:3期目)、羅臼町の脇紀美夫(70歳:2期目)がいた。このうち、三笠市、由仁町、下川町、天塩町、鹿追町、羅臼町の6自治体の首長選挙は、無投票当選となっている。選挙戦となった芦別市では、5選目をめざした林が、3,808票にとどまり、4,095票を獲得した48歳の清澤茂宏に敗北を喫した(62歳の三柳純一は3,451票)。また、沼田町では、4選をめざした西田が1,296票しか獲得できず、1,485票の金平嘉則(57歳)にやぶれた。今金町では、3選目をめざした外崎秀人(61歳)が3,502票で、653票の湯浅に大勝した。滝上町では、現職の長屋栄一(59歳:1,501票)が、828票の村山をくだした。さらに、大樹町では、4選をめざす伏見が2,852票を獲得し、64歳の水谷隆司(1,382票)をダブルスコアでやぶっている。

こうした結果をみると、若さが、無条件に、選挙戦で有利にはたらくというわけではないことがわかる。なぜなら、選挙戦を制するには、支援団体の票をかためられるかどうか

かといった要素や候補者個人のパーソナリティなど、さまざまな要因がからんでくるからだ。

したがって、今回の夕張市長選挙でも、鈴木候補の若さが強調されはしたものの、労働組合の支持という点が大きかったことはいうまでもない。しかも、鈴木は、財政状態のめぐまれた東京都との関係をことさら強調することで、有権者に“夢”をもたらしたのである。はたして、そうした夢が現実のものとなるのであろうか。

いずれにせよ、われわれは、「残り16年で322億円の赤字解消を目指す財政再生計画の中で夕張をどう再生に導くか」という疑問をかかえた鈴木が¹²⁾、どのような行政手腕を発揮するのかを注視していく必要がある。

注

- 1) 『北海道新聞』2011年4月25日、1面。
- 2) 同上、2011年1月12日、1面。
- 3) 同上、2010年11月12日(夕)、1面。
- 4) 同上、2010年11月13日、2面。
- 5) 同上、2007年3月9日(夕)、1面。
- 6) 同上、2007年4月23日、1面。もっとも、藤倉当選の背景には、土壇場で、空知管内選出の公明党道議会議員の支援をとりつけた点が大きいとされる(同上、3面)。
- 7) 同上、19面。
- 8) 同上、2011年1月16日、4面。
- 9) 同上、2011年4月22日、7面。
- 10) 『北海道新聞』〔空知版〕2011年4月15日、27面。
- 11) 『北海道新聞』2011年4月25日、1面。
- 12) 同上。

※ なお、第17回統一地方選挙の特徴に関しては、拙稿「第17回統一地方選挙の特質—東日本大震災との関連で—」『経済と経営』(2011年11月号)を参照されたい。

4月 札幌丸井今井と札幌三越 経営一

佐藤 郁夫

三越伊勢丹ホールディングス発足にともない、2011年4月に傘下にある札幌丸井今井と札幌三越が経営統合した。1997年をピークに低下を続ける所得や無店舗販売の台頭などが背景となって新会社はできあがったと考えられる。

しかしながら、両社はそれぞれ丸井今井が創業140年、札幌三越が開業80年と2012年に節目の年を迎える。これだけ長い歴史を刻みながら統合を迫られた両社を取り巻く経営環